

糖尿病で失明した頑固親父と盲導犬の心の絆

映画・医療ライター 小 守 ケ イ

京都府亀岡市。「声の壁新聞、音のタウンマップのコーナーです。」中年の視覚障害者男性の渡辺が、盲導犬のクイールとともにマイクを手に町を歩く。「良い香りがしてきました。山百合でしょうか。行ってみましょう。OK、ゴー!」。すると犬には花の匂いはキツイのか、クシャミの連続。「今の音はクイールのクシャミでした。もうすぐ神社です」。

ところが暫く行くと手に痺れを感じ、マイクを切る。「クーちゃん、休もうか」と腰を下ろした渡辺は、糖尿病の進行に落胆しつつも“でも負けないぞ”と自分を奮い立たせ、天に向かって大声で「秋深し どこ吹く風の糖尿病」と詠む。

映画は、脇腹の鳥が飛ぶような模様から“クイール(鳥の羽)”と名付けられた子犬が盲導犬に育てられ、頑固で犬嫌いだった渡辺の心を開き信頼関係を築く物語。主役はラブラドル・レトリバーのオス犬で、渡辺役の小林薫とともに大好演。原作はベストセラー「盲導犬クイールの一生」。崔洋一監督作品。

無茶な生活から合併症で失明

渡辺は現在、妻と中学生の娘、小学生の息子と暮らし、酒少々、禁煙の規則正しい生活だが、

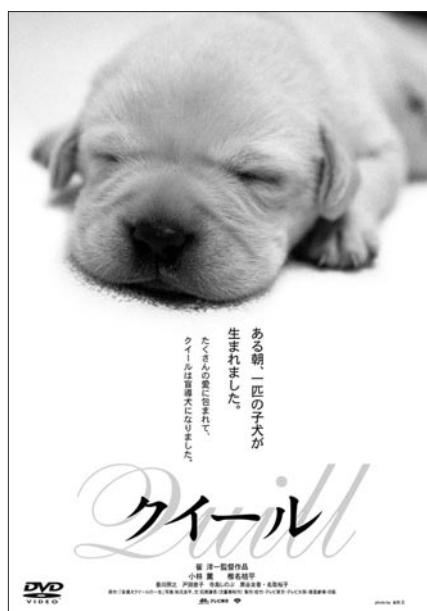
以前は無茶をしたというから、持病の糖尿病が悪化し、その合併症の網膜症が進行して眼底出血を起こし失明したのであろう。糖尿病から失明する人は、年間約3,000人に及ぶ。

糖尿病はインスリンの不足から血糖値が高くなり、全身が蝕まれる病気。当初はほとんど自覚症状がないが、血糖が高くなると喉が渇き、水をよく飲む、尿量が増えるなどの症状が出る。血糖が高いまま放っておくと、5年から10年で糖尿病特有の合併症である網膜症、腎症、神経障害が起きる。動脈硬化も進行しやすく、心筋梗塞、脳梗塞や足の動脈閉塞などが起きると生命も危ういが、食事・運動療法や禁酒、禁煙など生活習慣の改

善で病状の悪化を防止できる。

クイールの看病も及ばず病状悪化

渡辺の職場は市の障害者相談室。手が痺れた翌日もいつも通りクイールとともに出勤し、後輩の視覚障害者に「気合を入れて点字を覚えよ!」と一喝する。しかし、直後に突然の吐き気に襲われ、血液透析(人工腎臓)治療のため入院を余儀なくされる。クイールは片時も離れずベッド脇で見守るが、渡辺の病状が好転せず退院



©2004「クイール」フィルムパートナーズ
発売・販売元：松竹株式会社 映像商品部
制作：松竹・テレビ東京・テレビ大阪・衛星劇場・日販
写真：生まれたばかりのクイール

映画「クイール」

崔 洋一 監督、2004年、日本

の目途が立たないので、盲導犬訓練センターに戻って待つことに。その別れの時が実に名場面。渡辺はベッドに横になったまま胸の上で小さく手を振り続け、クイールは廊下で何回も振り返って名残を惜しむ。

渡辺の手の痺れは糖尿病性神経障害の症状であり、また、血液透析が必要になったのは、腎機能の急激な悪化のために嘔気、嘔吐、浮腫、貧血など腎不全の症状が出たからだ。糖尿病のために血液透析を開始する人は毎年約14,000人、原因疾患の第1位である。

「犬より先に逝っちゃダメだよ・・・」

渡辺が入退院を繰り返していた3年間、小中学校に盲導犬紹介のPR犬として働いていたクイールが、ある日、パッと飛び起きる！待ちに待った渡辺の白杖の音だ。やっと会える！渡辺は「オウ、元気にしてたな！」とクイールを撫で、早速、一緒に歩いてみる。しかし30メートルほど歩いた所で息が切れ、「クーちゃん、もうエエ。OK」と立ち止まる。そして、この時がクイールが渡辺に会えた最後だった。

渡辺の葬式。視覚障害者仲間の「よく面倒をみてもらった」、「声が大きくて迫力のある人だった」などの声の中、訓練センター所長がクイールを伴って出棺に駆け付ける。所長は棺の中の渡辺に「犬より先に逝くなんて・・・」と話しかけ、クイールは愛しそうに見つめる。

渡辺の死因は心筋梗塞による心不全だろう。血液透析患者は全身に動脈硬化が進行しやすく、心筋梗塞や脳梗塞を起こしやすい。糖尿病が原

因で透析を受ける人の5年生存率は約50%で、他の病気で透析を受ける人の約70%に比べると極めて悪い。

糖尿病予防にも役立つ動物映画

「お帰り、クーちゃん。ご苦労様。これからはノンビリおし!」。訓練センターで11年間働いたクイールは、1歳まで育ててくれた家で余生を過ごし、12歳で他界する。

愛らしい子犬の映像を楽しみながら、視覚障害者を支える盲導犬の役割や糖尿病患者の実態も学べる映画。特に本作から糖尿病や合併症のリスクを実感すれば、予防意識が大いに高まるだろう。今や日本人の6人に1人が糖尿病の時代、原因は過食や運動不足など生活習慣の乱れと言われるのだから、本作の意義は大きい。

監修：東京通信病院 内科部長 みや 宮 ざき 崎 しげる 滋

